
伝説回帰～5000年の時を越えて～ラッキー外伝

旅の語り部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説回帰〜5000年の時を越えて〜ラッキ―外伝

【Nコード】

N0239G

【作者名】

旅の語り部

【あらすじ】

本編では語られないラッキ目線から見た外伝です。

【食へと続く道（ラッキー目線）】

俺の名はラッキー、俺はこう見えても犬なんだぜ。

俺はテールの家で飼われている。

今日は、朝早くに目が覚めやがったぜ。ついてないぜ・・・

食堂で料理を作っている奴が、上の階にいる奴に大きな声で叫んでやがる、大きな声で・・・こっちの身にもなってくれよ。

機嫌が悪いのに、大きな声だしやがって、早く降りてこいよ！！！！

そう俺が思っていると、ようやく降りてきやがった。

上から降りてきたそいつは、俺に気づきもせず足早に台所に向かっていきやがった。

何様のつもりだ！！！！

俺は怒りが込み上げていたが、それよりお腹がすいていた。台所にいくと、そこには奴が飯を食っていやがる。

そして、俺のほうをじっと見ていやがる。

俺の飯はできていないようだ。

俺は食事を早くくれとなきつづけた。

奴は食事を済ませ、どっかに行こうとしていた。

俺は奴の消えていく後ろ姿を見ていた。

そこへ、ようやく俺の食事が出てきた。

俺も食事をさっさと済ませ、外に出かけた。

本編【食へと続く道】の内容が少し変わっていきます。

マーベル外伝【食へと続く道（母親目線）】の内容が少し変わって
いきます。

【ジェームズとテールの会話し日課になっている場所へ】（前書き）

食事を終え、家を出たラッキーは・・・

【ジェームズとテールの会話／日課になっている場所へ】

本編【序章／日課になっている場所へ】をラッキー目線で見ています。

俺は、家の外に出た。

街は、活気にあふれ、さまざまな人が行き交っていた。

よく見ると、見慣れた二つの人影が見えた。

一人は朝、さっきまで俺の横で食事をしていたあいつだ。

むこうは、俺がいるのに気づいたようだ。

もう一人の方は、あいつとよく一緒にいる奴だ。

確か、ジェームズとかいったよな。

ジェームズとか言う奴が、あいつに何か言っている。

あいつは、少し考え事をしているようだった。

あいつは、考えがまとまったのか。

もうひとりの奴に何か言っている。

本編選択肢Aを選んだ場合

あいつは、ジェームズと一緒に、歩き出した。

あいつらが見えなくなると、俺は、街の中を散歩する為歩き出した。

本編選択肢Bを選んだ場合

あいつは、一人で歩きだした。

あいつを見送るジェームズは、すごいオーラを放っていた。

あいつが見えなくなると、俺は、街の中を散歩する為歩き出した。
ジェームズは、あいつの後を追ったように見えた。

選択肢Cを選んだ場合

あいつは、ジェームズと、俺に向かって、行こうといった。

俺は、暇だった為あいつについていった。

ラッキー外伝選択肢C【泉の妖精1】

俺は、あいつの後ろを一緒に歩いていた。
少し歩いた所に泉が見えた。

ジェームズの野郎も泉の方を見ていた。
あいつとジェームズは泉で休憩をとるようだ。
まあ、俺も疲れたから、少し休むとするか。

しばらくすると、あいつが、
大きなおにぎりを食べようとしていた。

だが、おにぎりは、あいつの口に入ることなく地面を転がり
泉の中に落ちていった。

あいつは、不機嫌そうな顔をして泉の方を見ていた。
俺も、大きなおにぎりが落ちた泉を見ていた。

その時、ジェームズが叫んだ。
「泉が光り始めたよ！！」
俺は、泉から光が出てくるのを見た。

あいつは、驚いていた。
このあと、さらにあいつが驚くことが起きた。
泉の中から小さな人間が現れた。

小さな人間も驚いたのか。
泉の中へと戻っていった。
俺は、小さな人間が泉の中から興味を示し、泉の中へ潜った。

・ ・ ・ ・ ・

数時間後、戻ってくる事になる。

本編選択肢C【泉の妖精1～泉での待機】の内容が変化します。
マール外伝が見れるようになりました。

ラッキー外伝選択肢C【追え 小さな人間!!】

俺は、今、泉の中に潜っている。

泉の中から現れ、そして泉の中に潜った小さな人間を追って・・・

・・・

少し前に、人影が見えてきた。

・・・

やっと追いついた。

だが、小さな人間に追いついた時、広い場所へ出た。

俺は、広い場所の風景は、今まで見たことなかった。

それは、妖精の村だった。

そう、小さな人間は、妖精だったのだ。

風景に見とれていると、小さな妖精は、また遠くの方へと行っていた。

俺は、追いかけた。

真っ直ぐにある場所へと向かっていた。

追いかけている時に、周りの人々は、妖精だらけだった。

ようやく追いつくと、ある建物に辿り着いた。

その建物は、他の建物より、立派な造りになっていた。

その建物の中に俺は、入った。

中は、威厳のある内装になっている。

目の前に、泉の中から顔を出した妖精と
長老らしい男がいた。

長老は、俺に妖精のオカリナと、泉の中から顔を出した妖精
マールを連れて行けと俺に言った。

俺は、急いできた道に戻り始めた。

ラッキー外伝選択肢C【再び日課になっている場所へ】

泉での道を、急いで戻っていった。

俺とマールは、泉の入り口まで戻ってきた。

泉まで戻ると、テールとジェームズが泉の周りでくつろいでいた。

俺は、あいつとジェームズにマールを紹介し、妖精であることを伝えた。

二人は、驚いていた。

その顔はすごかった。

しばらくして、俺と3人は、あいつが、日課になっているという場所へと急いだ。

道中歩いていると、木々がざわめいていることに、不安に駆られた。あいつが、もうすぐ日課になっている場所に着くといってきた。

日課になっている場所に近づくにつれ、獣の匂いが漂ってくる。

俺達は、日課になっている場所へと到達した。

そこから見る風景は、綺麗だった。

しかし、先ほどから漂ってくる獣の匂いが、近づいてきた。

振り返ると、普段は、おとなしいはずのオークが襲ってきた。

俺は、襲ってきたオークを、一撃の下に気絶させた。

あいつらは、そのことに気づきもしなかった。

俺は、日課になっている場所から見える風景を眺めていた。すごく綺麗だった。

しかし、街の方から煙がでているのを見つけた。
俺は、一生懸命そのことを伝える為、吠え続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0239g/>

伝説回帰～5000年の時を越えて～ラッキー外伝

2010年10月9日01時35分発行